

介護老人保健施設 しおさい

症 例 概 要 利用者氏名：ご利用者 90代 女性

病 名：慢性腎臓病 心房細動

利用サービス：令和4年10月より長期入所

経 過：入所時は不定愁訴が多く、ご家族からも悲観的な印象を持たれていた。職員が協力して遠方に住むご姉妹さんのビデオメッセージを通し、ご本人の不定愁訴が無くなり、活気を取り戻し、ご家族との関係の再構築、ご本人には輝きの1日を、ご家族には安心を超えた感動を与えられた症例

内 容

入所当初、ご本人は「耳が突然聞こえなくなった」「目が見えない」といった不定愁訴が多く、職員との意思疎通も困難でした。さらに、キーパーソンである甥も関わりが少なく、「昔からこういう感じなので、適当に流していただいて構いません」と話され、支援への関与は限定的でした。そんな中、ご本人の「その人らしさ」や「好きなこと」を探る手がかりが見つからない状況が続きましたが、ある日、群馬に住む妹さんからお手紙が届きました。そのお手紙を伝え、ご本人は満面の笑みを浮かべ、妹さんとの思い出を楽しげに語り始めました。職員はその反応に驚き、ご本人の笑顔をもっと引き出したいという思いが生まれました。そこで、キーパーソンの了承を得たうえで、ご本人と相談し、妹さんへのお返事としてビデオメッセージを作成することになりました。撮影が始まると、ご本人は自然と笑顔で話し、冗談を交えながら、愛らしい一面を見せました。職員一同もその和やかな雰囲気にも包まれました。完成したビデオメッセージを妹さんに送ると、「元気な姿が見られて本当にうれしい」と涙を流されるほど感動されたとのことでした。このやりとりがきっかけとなり、季節ごとの手紙やビデオメッセージでの交流が始まり、今も続いています。また、これまで関わりが少なかった甥も動画を通じて妹さんと連絡を取り合うようになり、ご本人への理解が深まりました。「元気な姿が見られてうれしい」と温かい言葉をいただき、家族関係にも前向きな変化が見られるようになり、面会時には笑顔で会話を楽しむようになりました。職員も当初は不定愁訴により関わりにくさを感じていましたが、ビデオメッセージを通じてご本人の内面に触れ、関係が深まりました。その結果、職員は積極的に声かけを行い、ご本人にも良い影響を与えました。不定愁訴は次第に軽減し、他のご利用者との交流も増え、今では施設のムードメーカーとして、キラキラとした毎日を過ごしています。この取り組みは、ご利用者に寄り添う職員の支援が、ご本人に“輝きの1日”を、ご家族には“安心を超えた感動”を届けた事例です。

【多職種の関り】

[看護]: ご本人の不定愁訴に対し、身体的・精神的な状態を観察し、安心感を与えるケアを実施。妹さんからの手紙をきっかけに、心理的な変化を捉え、心のケアに注力。

[入所介護]: 日々のケアでご本人の小さな変化に気づき、コミュニケーションを工夫。ビデオメッセージを通じて笑顔が見られ、支援の方向性を見直し積極的に関わった。

[リハビリ]: ご本人の活動意欲を引き出す支援を行い、社会参加を促進。他のご利用者との交流も活発になり、QOL向上させた。

[連携室]: ご家族との橋渡し役として、妹さんとのやり取りをサポート。甥との関係構築を支援し、ご家族との継続的な交流が、ケアの質を高めた。

[事務]: 撮影サポート実施